星の世界

紙屋里子

五月の始め頃、六年生の音楽授業が終わった時二、三人の男の子が、ピアノを閉めようとしている私の回りに集まってきた。

二年生くらいの背丈しかない小さな可愛いA君が、私に頼んだ。

「僕な『星の世界』ていう歌が好きやねん。かがやくよぞらのほしのせかいよと、のぞめばふしぎなほしのせかいよっていう歌詞のところな。先生ピアノ弾いて、歌いたいねん」

「僕も一緒に歌いたい」と、他の子供たちも言う。

ずっと先に教える歌なのでまだ、ピアノの練習をしていなかったが『星の世界』のページを開けた。見ると私の知っている歌だったので、「いいよ」と、言ってしまった。左手はドミソの分散和音にして、右手手動でピアノを弾く。周りに集まった子供たちも、まだ座っている子供たちも一緒に歌い出した。

「先生、ピアノよう間違うなあ、歌えへんで」みんなで笑う。私は顔が熱くなって汗が出た。恥ずかしかった。

四月に、教師になったばかりの私は、二年生の担任をしている。低学年は時間数が少ないので出張授業と称して高学年の授業を、二時間担当させられた。私は六年の音楽だ。

若い女教師は音楽が堪能だと思われているが、私は大の苦手だ。歌を歌おうものなら、口の悪い兄から『味噌が腐る』と言われるほど音痴。私の育った家は、裕福ではなく、ピアノを買ったり、習ったりまではさせてもらえなかった。ピアノは大学の時、教育学部で二年間習っただけだった。

職員室で、六年生担任のD先生が笑いながら聞いてくれた。

「A君は心臓が悪いんや。だから、なかなか大きくなれないんや。二十歳ぐらいまでしか生きられないやろって言われている。だけど素直な優しい子なんや。勉強も

一生懸命するんやで。そうか、星の世界が好きや言うてたか。頼むわな」

それまでは週二、三回だけ、夕方音楽室で練習していたピアノを、ほとんど毎日練習するようになった。次の授業で教える歌だけでなく、ずっと先に教える歌も練習した。下宿にはピアノがないので、日曜日の練習も学校に来た。

夕方、音楽室でピアノの練習をしていると、音楽室のドアの辺りに二、三人ソッと誰かが覗きにくる。中には入ってこないが、しばらく見ている。ふふっと、笑う声が聞こえるときもある。しばらくすると、いなくなった。

週二回の音楽の時間は、緊張の連続だった。特にピアノを弾くときは、体がこわばり汗が出る。

授業中、ピアノを弾いていると、M子ちゃんが、とことこっとそばにきた。

「先生、そこな、ミの和音じゃなくてファの和音にせなあかんで。音が濁ってるやろ」と、教えてくれる。「ありがとう」と、答えながら汗がどっと出る。

M子ちゃんは三歳からピアノを習っていて、毎年発表会に出ているという。教師の私よりもずっと経験がありうまいのだ。

三月、六年生はもうすぐ卒業していく。音楽の授業が今日で最後という日だった。

「歌いたいもの、何かない」と、聞く。

「星の世界」と、答える。

私は、今日こそは絶対ピアノを間違えないで弾こうと力んでしまった。力むとまた、間違える。

「先生、最後までよう間違えたなあ」

クラスみんなで笑う。はずかしかった。

卒業式の日になった。式が済んでから、在校生と教師とで、校庭に〈花道〉を作り六年生を拍手で送る習わしになっていた。

拍手と「おめでとう」の声の中を、六年担任の先生を先頭に、卒業生と保護者が花道を歩く。在校生は、希望に満ちた卒業生を身近に見られる。素晴らしい一時である。

A君が、お母さんと歩いてくるのが見えた。

「おめでとうございます」と言って拍手をすると、小さな可愛いA君が、私を見て走ってそばにきた。

「先生、ピアノだいぶ上手になったな」

にっこり笑う。

音楽を教えた子供たちがニコニコ笑って、私に手を振っている。

私はどう言ったら良いか分からない。涙が出て、いつまでも、いつまでも止まらなかった。